
短編集

miso@

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N7984G

【作者名】

misso@

【あらすじ】

主に笛！のBだったりNだったりの小説です。たまに復活！もあるかもしれませんが。そしてごくたまにオリジナルもあるかもしれませんが。せん^q^ サイトのものを加筆修正して掲載しているものもあります。決してパクリ等ではございません。同タイトル、同内容のものでしたら、それは多分俺のサイトです↑

主に笛！のBだったりNだったりの小説です。

たまに復活！もあるかもしれませんが。

そしてごくたまにオリジナルもあるかもしれませんが^q^

サイトのを加筆修正して掲載しているものもあります。

決してパクリ等ではありません。

同タイトル、同内容のものでしたら、それは多分俺のサイトです↑

h o t m i l k

「あ……。」

特に何かがあつた訳じゃない。

ただ、なんとなく。

本当になんとかなく、思い出したただけなのだけど。

「ほつとみるく…飲みたいなあ。」

ふと呟くとあなたは怪訝そうな表情をする。

私はそれを気にせずにもた呟いてみる。

「ほつとみるく、飲みたい…。」

「どうしたんだ？いきなり。」

あ、反応してくれた、何て。

ちよつと嬉しくて。

「んーん、思い出したただけだよー、優しい味だったの。」

そうか、とあなたは興味なさ気な（実際ないんだろうけど）返事を小さくして書類へ視線を戻す。

時計の音と2人の息遣い。

雨の音が混ざり合って、静かな時間。

「あれ……？」

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

窓の外はもう雨なんか降っていないくて、かわりに大きな虹の架け橋。

後ろでパタン、と小さく音がなって、振り返れば愛しいあなた。

その手にはマグカップが2つ。

カップからは湯気が上がっている。

「起きていたのか。」

後ろ手で器用にドアを閉める。

ほら、と渡されたマグカップの中には乳白色の液体。

一口飲んでみると、口いっぱいに広がる甘い、甘い。

頬が自然と綻んで

「おいしい……。」

あつたかくて、甘くて…。
何て幸せなんだろう。

* - - -

G H 知ってる方はナルを思い浮かべてくださると嬉しいですよ、こんな優しくないって・・・？

・・・きつと麻衣には優しいんだよ！

H P では変換無夢小説に入れてます
↑

恋めぐり（前書き）

中西↑笠井？あれ？

恋めぐり

俺は・・・

恋めぐり

「ねえ、笠井ー？」

「…なんですか。」

この間延びた声が

「明日暇？」

「明日…ですか？明日は…楽譜買いに行くつもりですけど。」

「ふうん。」

興味無さそうに向けた背中が

「明日なんかあるんですか？」

くすくすと笑うあなたが

ピピーン！！

笛が鳴る。練習終了の合図だ。

「集合！」

キャプテンの声に合わせて皆が集まりだす。

「……という訳で午後は休みだがはめをはずしすぎないように。」

「「「「はいつ！！！」「」」」」

「以上、解散！」

その声を皮切りに皆は思い思いに散っていく。

水分を取る者、早々に寮に戻る支度をする者。

その中でも俺はタオルとボトルを詰め込んだバッグを持って寮へ走り出す。

ベタついた汗を流して久々の休みが故の買い物に出かける準備。

部屋を出れば自主練でもしていたのだろう少し遅めに帰ってきた部員と鉢合わせ。

どこか行くのか？などという質問にはあいまいに答え煌々とした気持ちで玄関へ向かった。

「笠井っ！！！」

門を出るところで知った声に名前を叫ばれた。

振り向いてみれば着替えたただけなのだろう、練習後にまた走ってる。

目の前に来たとき、本当に疲れたようで息を切らすあなたが

「俺も・・・行く。」

そう言って横に並んだ前を見据えたあなたの横顔

「・・・はい。」

あなたの全てが大好きで…

愛しい

うたかた（前書き）

三上↑笠井の切ないようなそうつじゃないような片思い

うたかた

好きです。

好きで好きで押さえられない。

あなたへのこの想い、どうすればいいのですか・・・？

うたかた

ツキン・・・

何だろう、この痛み。

先輩を見ると苦しくて苦しくて。

でも・・・、嫌だとかそういうんじゃないか
なくて何ていったらいいのかわからないけど。

##

何か、そう。あの日から。

俺は気付いてしまったんだ。

決して叶う事の無い

自分のなかの想いに。

明かりが見えたような気がしてた。

本当は暗闇だったのに。

それを知った俺を導き救ってくれたのは・・・

三上先輩・・・。

先輩・・・。

知らなかった。

こんなにも大きくなっていた想いが

とてつもなく苦しいなんて。

救ってくれたのは先輩。

だけど・・・

だけど先輩は遙か彼方の遠い存在のような気がする。

同じチームメイトなのに。

こんなにも近くに居るのに。

ひどく遠い・・・。

でも俺は少しでも近付きたい

周りは目に入らない

俺の瞳に映っているのは

三上先輩だけだから・・・

でも・・・どうしてだろう。

叶わないなんて事わかりきっているのに。

わかっているのに！

それなのに・・・それなのに。

あなたへの想いは簡単には消えてくれない。

こんな・・・こんな気持ちを・・・。

相手が幸せなら良いなんて嘘で

この想いが届けば良いとずっと思っているのに。

お願いします。

叶わなくても良い。

叶わなくてもいいんだ。

だからどうか。

どうかあなたの気持ちを知らずに居させて。

俺のこの想い、散らないで居て。

夢を・

見させて・・・・。

「うっ・ふ・くっ・み・かみ・せんぱ・
うっ・うっ・うあぁっ！・」
う・

ヒトヒラの淡い花びらが泡沫のように舞い散る

●あとかきという名のとりあえずあとかき
会話無し。笠井↓三上で突発短編

イメージ・・・っていうかまんまポルノグラフィティのうたかたです
最高の切ない三笠（笠↓三）曲だと思っています。

ちなみにこの笠井君は寮の自室で（多分藤代が寝た後？）夜。
夜中かな、窓辺で夜空見上げながらだとイイです。

2006/09/04

2007/01/01

加筆

B u t t e r f l y (前 書 き)

4 年 前 の \ (^ O ^) /

Butterfly

Butterfly

「中西っ、見てみて!!」

すっげー!きれー!!　なんてネギちゃん…。

中2にもなつて蝶なんかで興奮してる。

きれいだなー、ってすごく嬉しそうな顔をしていうから。
思わず「そうだね」って言ってしまうんだ。

「中西ー。」

「・・・何?」

さつきは嬉しそうな顔してたのに今は何か苦しそうだ。

「蝶ってさ。すぐに死んじゃうんだよね?」

ああ・・・。

「そうだねえ。」

「寂しいな、こんなにきれいなのに。」

「ネギちゃんは感情豊かだねえ。」

でもさ、この蝶だって卵産んで。また何年か後には綺麗な蝶が空を飛んでるんだよ」

そう。

蝶はすぐ死ぬけど。

その分何年もかけてずっと土の中で眠っているんだ。

「ネギちゃん、そろそろ行こう？時間無くなるよ。」

「……、うん……。」

「……、靖人。大好きだよ。」

「……うん。俺……俺も好き。」

うん。

本当に…。

すぐに死んでしまう命だけど。

だからこそ・・・かな。

「でもすぐに死んじゃうんだよね…？」

「…靖人、それ去年も聞いたよ。」

「そうだった？」

「ん。」

「そつか・・・、見るたび思ってるのかなあ、俺。」

「そうなんじゃない？」

確か一昨年も言ってたよなあ、なんて思う。

「あ・・・。」

ネギちゃんが奥一点を見つめている。

同じ方向へ目を向けてみれば一匹の蝶が地面に横たわっていた。

「かわいそう。」

かわいそう、なのかな。

よくわからないけど。

「靖人、埋めてあげようか。」

「うん…。」

ちよつと涙ぐんでるネギちゃんをとてつもなく愛しく思った。
きつとヒトのために自分を犠牲にすることを否まないだろう。

俺が…死んだらどうするんだろう。
そのままかな。

「靖人。」

「・・・」

「靖人、もし・・・俺が死んだらどうする?」

そんな泣きそうな顔して。
泣いてくれるんだ。俺のために。

「中西…?」

「なーに?」

「何で…そんなこと言うの。 何で・・・っ」

靖人は優しいね。

いつか自分を壊してしまうんじゃないかって不安だよ。

「んーん、靖人は優しいから。 どうするんだろうなって。」

「泣くよ、絶対泣く。
でも・・・泣いたら笑う。中西は俺が泣いてばかりじゃ嫌でしょ？」

靖人・・・。

長い。

「・・・うん。俺：俺も好き。」で終わる所が短いのが嫌で一年後を付け足し。

：したらめっさ長くなったよー・・・。

中西似非でごめんなさい；

ネギちゃんは小さい生き物もすぐ目についてその為に泣けるんだろうなって。

思いました、うん。

一発書すみませ；

2006/12/05

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7984g/>

短編集

2010年10月11日19時05分発行